『菩薩處胎經』の懈慢界

高田文英

一、はじめに

懈慢界とは諸經典のなかでも、竺佛念譯『菩薩處胎經』（以下『處胎經』と略す）卷三、八種身品第八のみに登場する世界である。その世界は、阿彌陀佛の極樂國土の途中にあり、極樂への願生者を誘い込む快樂に滿ちた世界として描かれている。そして人々は、皆この懈慢界に染著してしまうため、そこからさらに前進して極樂國土へと生ずることのできる者は億千萬に一人しかいない等と說かれる。

この『處胎經』の懈慢界は、淨土敎の歷史において、基の『阿彌陀經疏』に引用が見えるのを嚆矢として、智首『阿彌陀經隨祿義鈔』、懷感『釋淨土群疑論』、宗曉『樂邦文類』、源信『往生要集』、永觀『往生拾因』、源隆國『安養集』、撰者失名『安養抄』、珍海『菩提心集』『決定往生集』『安養知足相對抄』、法然『無量壽經釋』『往生要集詮要』、そして親鸞の諸種の著述などに取り上げられている。

阿彌陀佛の淨土との關係、〈無量壽經〉[1]の邊地との異同、凡夫往生との整合性等々、『處胎經』の懈慢界の說は、とくに淨土敎の佛土觀・往因論との關係において、論ぜられるべき幾つかの問題を含み、淨土敎の歷史のなかでさまざまな解釋が加えられている。

本稿は、後世淨土敎のなかに導入されていくこの懈慢界の說について、『處胎經』の原意を明らかにし、またその思想的な素材となったと豫想される〈無量壽經〉の邊地との關係に

ついて檢證することを目的とするものである。

二、『處胎經』について

懈慢界が説かれる『處胎經』は、正式には『菩薩從兜術天降神母胎説廣普經』、七卷三十八章からなる。漢譯經典のみが傳わっており、『大正藏』では第十二卷の涅槃部に收錄されている。本經について『大藏經全解説大辭典』には、次のように解説されている。

〈内容〉七卷。三十八章からなる。佛の入滅を描く經典。まさに入滅を控えた佛が、兜率天での母摩耶夫人に對する説法、龍宮での龍に對する説法、中でも母の胎内で菩薩たちに對して爲した説法を、阿難が聞いていないことを哀れみ、母の胎内で爲した菩薩行に關する説法を再現してみせる。先ず母の胎内に處する樣子を示現し、以下第三十五章まで胎内での説法である。三十六章で、ようやく迦葉が佛のもとにたどり着き、佛は荼毘に付される。三十七章では、八大國の王が佛舍利塔を建立したこと、三十八章では、經典が讀誦されたことが記されている。

〈譯者・譯年代〉姚秦の竺佛念(2)（AD412-413）

譯者の竺佛念については、丘山新氏の研究(3)に詳しく、『處胎經』の譯出は『出三藏記集』の佛念法師傳(4)によれば姚興の弘始の始（三九九年）以後となる。また『佛書解説大辭典』には、本經の思想的特徴に關して「すべて空の思想を開説す(5)」との指摘が見られる。

『處胎經』に關する研究は、これまでほとんどなされてこなかったが、近年、エルサ・レジッティモ氏によって本經の内容分析や研究論文が發表されている(6)。そのなかでレジッティモ氏は、次のような見解を提示されている。

『處胎經』の著者の第一の目的は、釋迦牟尼への信仰を强化し、他の有名な如來たちからその威光を取り戻すことにあった。このため、著者は意圖的にその世界觀に合致しない諸經の物語と主題を利用し、變容させたといえる(7)。

すなわち、『處胎經』が釋尊への信仰を鼓舞する經典であること、この經典制作の意圖に合致するように他經典の素材が改變して用いられていることを、『法華經』「見寶塔品」・『維摩經』「香積佛品」との關係の上に明らかにされている。

こうしたレジッティモ氏の指摘は、本論のテーマである懈慢界の説意を考える上にも大きな示唆を與えられるもので、後に改めて論ずることにしたい。

三、懈慢界の内容と語義

懈慢界の説は、『處胎經』巻三、八種身品第八に説かれる。その全文は以下に擧げるとおりであり、まずはその内容について確認しよう。

①或有菩薩摩訶薩。從初發意乃至成佛。執心一向無若干想無瞋無怒。願樂欲生無量壽佛國。一切衆生其生彼者。四部衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆同一金色。

②西方去此閻浮提十二億那由他。有懈慢界。國土快樂作倡伎樂。衣被服飾香花莊嚴七寶轉關床。擧目東視寶床隨轉。北視西視南視亦如是轉。

③前後發意衆生。欲生阿彌陀佛國者。皆染著懈慢國土。不能前進生阿彌陀佛國。億千萬衆。時有一人能生阿彌陀佛國。

④何以故。皆由懈慢執心不牢固。斯等衆生自不殺生。亦教他不殺。有此福報生無量壽國。

（大正一二、一〇二八頁上、番號・改行は筆者）

①或ひは菩薩摩訶薩有り。初發意從り乃ち成佛に至るまで、執心一向にして若干の想無く瞋無く怒無くして、無量壽佛國を願樂し欲生す。一切衆生、其れ彼に生ずる者は、四部衆の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、皆な同一に金色なり。

②西方此の閻浮提を去ること十二億那由他に懈慢界有り。國土快樂にして倡伎樂を作す。衣被・服飾・香花もて莊嚴し、七寶轉關の床あり。目を擧げて東を視れば寶床隨ひて轉ず。北を視、西を視、南を視るも亦た是の如く轉ず。

③前後發意の衆生、阿彌陀佛國に生ぜんと欲する者、皆な懈慢國土に染著して、前進して阿彌陀佛國に生ずること能はず。億千萬の衆、時に一人有りて能く阿彌陀佛國に生ず。

④何を以ての故に。皆な懈慢に由りて執心牢固ならず。斯等の衆生、自ら殺生せず。亦た他をして殺さしめず。此の福報有りて無量壽國に生ず。

①―冒頭、阿彌陀佛の國土へ往生する菩薩のありさまが説かれる。彼らは、執心一向にして若干の他想もなく、瞋怒なき者と表され、彼の國土へ生ずる者は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の別なく、皆な同一に金色となると説かれる。

②―それに續き、懈慢界への言及となる。閻浮提の西方十二億那由他にあるその世界は、歌や舞い、華やかな衣服や香花に飾られ、また七寶の床が回轉する享樂的世界として描かれている。

③―そして、阿彌陀佛の國土を願生する者は、皆な懈慢國土に染著して、さらに前進して阿彌陀佛の國土へ往生することができる者は、わずかに億千萬に一人しかいないという。

④―その理由は「懈慢に由りて執心牢固ならず」と示され、また、自ら殺生せず、他をして殺さしめない者が、その福報により懈慢國土から阿彌陀佛の國土へ生ずると說かれる。

經典の制作者は、この懈慢界の說において、何を示そうとしているのであろうか。ここではともかく、次の二點を確認しておきたい。

一つには、この箇所は、八種身品のうち他方世界の諸佛國土へと往生する菩薩のありさまを說く一段のなかにあり、その意味では、阿彌陀佛の國土へと往生する菩薩のありさまを描く①の部分こそ中心のはずである。しかしここでは、①の表記は簡略に濟まされ、それに續く懈慢界に關する記述が大半を占めており、力點は明らかに懈慢界のほうに置かれている點である。

また二つには、懈慢界を說きながら、億千萬に時に一人しか阿彌陀佛の國土へは往生できないと、往生それ自體の困難性が强調される點である。後の淨土敎においては、こうした往生の困難性を示す本經の說示をうけて、執心牢固・不牢固の中身が探求され、專修念佛を勸め、佛力に歸すべきことを敎えるものと解釋されていく展開があるが、『處胎經』の原意はまた別のところにあるように思われる。次項以降において、引き續き考えることにしたい。

なおここで、「懈慢界」という名稱の語義についても檢討しておきたい。この名稱については、「懈怠驕慢」の義とするものと「懈怠慢墮」の義とするものがある。[8] まず、「懈慢」の「懈」が「懈怠」（なまけ心）であることは、先學の見解の一致するところで疑問の餘地もない。そして「懈慢」の「慢」には「驕慢」（おごりたかぶってあなどる意）と「慢墮」（なまけ心）の二つの解釋があるわけだが、懈慢界の名稱は、『處胎經』前揭④の文中に「懈慢に由りて執心牢固ならず」とある願生者の心的態度に由來する語句と言える。その點からすれば、「慢」を「驕慢」の義とすることは經文から直接讀み取ることが難しく、どちらかと言えば「慢墮」の義としたほうが無理がないように思われる。[9]

ただし、上述のように「懈慢」の義を「執心不牢固」の語から規定するならば、懈慢を單になまけ心とする「懈怠慢墮」の義よりも、「懈怠散漫」の義としたほうがより相應しく思われる。「懈慢」の「慢」に「散漫」（心が散亂している様）の意があるとすることは、用例が擧げられていないものの『漢語大詞典』に指摘が見える。[10]「懈慢」は「執心牢固」「執心一向」と對義語にあるから、「懈慢」の「慢」を、心が散亂している様を意味する「散漫」の義と取れば、「執心」[11]の牢固・不牢固との内容的なつながりが一層明らかになるものと思われる。こうしたわけで、ここでの「懈慢」は「懈怠散漫」の意で、「懈慢界」は「懈怠散漫なる者が生ずる世界」を意味するものと理解しておきたい。

四、八種身品全體の内容

『處胎經』で懈慢界が説かれるのは、卷三、八種身品第八である。この章は大別して三つの段落に分けられる。

まず冒頭の段落（大正一二、一〇二七頁下七行目～一〇二八頁上三行目）では、佛の正覺は、見地・薄地・淨地・如來地・辟支佛地・不退轉地・道場地・説法地の八地より生ずることが説かれ、このうちとくに見地について、自らの心を伏し諸魔を伏して三昧に入る位で、佛の無言教三昧のごとく變化三昧を示現する等と説かれる。

これに續いて、弊魔波旬が出現し、波旬・諸魔との關わりをもとに、釋尊の神力の偉大さが示されるのであるが、これは釋尊の菩薩行が、直前に示した變化三昧を示現する見地の德を滿足するものであることを示すものと言える。

すなわち、波旬が、怒りや害心を起こして聲を響かせ地を振動させて釋尊を惱ませようとするが、釋尊は三昧力をもって不動不搖であり、かえって諸魔をして降伏せしめ、諸魔の惡聲を流布せしめる。この釋尊の行いは、衆生教化のためであり、俗法と道法といずれが眞實かを衆生に教えるためである。また諸魔自體も、執心が軟弱で丈夫の意なき者を、佛道に向かわせるための、釋尊自らの所作であると明かされる。

このように冒頭の一段では、諸魔を伏する、變化三昧を示現するという見地の内容について、それは釋尊の菩薩行の上に具現化されていると表し、釋尊の衆生教化、利他性を强調する内容となっている。

次の段落（大正一二、一〇二八頁上三行目～一〇二九頁下一四行目）では、他方の諸佛世界へと生ずる菩薩について、四方四維に在する佛・佛國土を一々擧げながら、それらの佛國土へ

生ずる菩薩のありさまが列示される。

順番に、東方阿閦佛の國土、北方光影佛の國土、西方無量壽佛の極樂國土、南方踊躍佛の國土、東北花英佛の果熟國土、西北寶瑠璃佛の國土、西南一往佛の無想國土、東南信解佛の瑠璃國土。前掲①～④の引文は、三番目の西方無量壽佛の極樂國土を明かす箇所の全文ということになる。

そして最後の段落（大正一二、一〇二九頁下一四行目～一〇三〇頁上一八行目）では、釋尊と眼淨という天子との問答が置かれている。最初に諸法の實相は前にも後にも窮め盡くすことができない等と、空の思想が說かれ、さらに續けて後半では、本章の冒頭に同じく釋尊の利他行の優れていることが說かれる。以下の文がそれである。

佛告眼淨菩薩。吾從無數阿僧祇劫積行福業。普念一切沈溺衆生。悲念哀苦欲令度脫。所以者何。吾今處胎所欲滅者。都已滅盡。果願成報今日已獲。彼土衆生。不以成佛不成佛以此爲累。所以者何。彼土衆生建意勇猛。不處有胎不處無胎不處化生。功德成就非覺非不覺。何者是覺。云何非覺。一切衆生愚癡者。我悉覺之是覺。一切學人斷結使者。是非覺。爾時世尊。卽說偈言

覺佛出世間　遠放大光明
苦集滅結使　獨立無敢近
正使地振動　三界猶若塵
執心入定意　衆相各不異
如來至眞念　除想不入定
還入衆生中　因造更造緣
精進勇慧智　化導愚癡人
導引衆生類　可度不度者

（大正一二、一〇三〇頁上）

佛眼淨菩薩に告げたまへり。吾れ無數阿僧祇劫從り福業を積行す。普く一切沈溺の衆生を念じ、悲念し哀苦して度脫せしめんと欲す。所以は何ん。吾れ今胎所に處するに滅せんと欲さば、都て已に滅盡せん。果願報を成じて今日已に獲べし。彼の土の衆生、成佛・不成佛を以てせず。此を以て累と爲す。所以は何ん。彼の土の衆生、建意勇猛にして、有胎に處せず、無胎に處せず、化生に處せず。功德成就せるも覺に非ず不覺に非ず。何者か是れ覺。云何んが非覺。一切衆生の愚癡は、我れ悉く之を覺す。是れ覺なり。一切學人の結使を斷ずるは、是れ非覺なり。爾の時世尊、卽ち偈を說きて言く。

覺佛は世間を出でて　遠く大光明を放ち

苦集滅の結使　獨り立ちて敢へて近づくこと無し
正に地をして振動せしむ　三界猶ほ塵の若し
執心にして定意に入らば　衆相各の異ならず
如來眞念に至りて　想を除くるも定に入らず
還りて衆生の中に入りて　因を造り更に緣を造る
精進勇みて慧智をもて　愚癡人を化導す
衆生の類を導引して　度せざる者を度すべし

最初の散文は「彼土衆生」すなわち他方世界へ往生した者と釋尊との對比である。他方世界へ往生した者は、成佛・不成佛を問題とせず、こうしたことを「累」すなわち煩しいことと考えている。そして建意勇猛にして、有胎にも無胎にも化生にも處すことなく、功德を成就しても、覺（一切衆生の愚癡を覺す）も不覺（一切學人の結使を斷ずる）もなさないと說かれる。そしてこれに對し釋尊は、覺・不覺の利他行をなすことが示される。

これにより、例えば他方世界へと往生する菩薩を列擧するうちの冒頭の阿閦佛の一段には「不因濕生・卵生・化生・胎生敎化衆生（濕生・卵生・化生・胎生に因らず衆生を敎化す）[12]」とあって、一見すると胎・卵・濕・化の四生に因らないことは、輪廻を超えていることを含意するもので、肯定的な表現のようであるが、最後に至るとそれがあえて胎に處した釋尊の菩薩行を際立たせる上での布石としての意味を持っていることが知られるのである。

續いて偈頌では「覺佛[13]」すなわち獨覺と釋尊が對比されている。獨覺は世間を超出して煩惱に敢えて近づこうとせず、三界は塵のごとしと達觀している。心を專一にして（執心）禪定（定意）に入り、差別の相を見ようとしない。これに對し釋尊（如來）は、定に入ることなく衆生の中に入り、あえて因緣を造って愚癡人を化導し度すると說かれる。

このように八種身品全體の文脈からすれば、この章に說かれる他方世界へと往生していく菩薩たちには、肯定的な評價が與えられているとは言い難く、むしろ獨覺とほぼ同列の扱いで、あえて輪廻の中に分け入り胎に處した釋尊の菩薩行を讃えるための對比の意味において說かれているものと考えられる。

そして、こうした本章の內容は、冒頭に紹介したレジッティモ氏の「釋迦牟尼への信仰を强化し、他の有名な如來たちからその威光を取り戻す」と言われる『處胎經』制作の目的に合致するものと捉えることができる。

五、懈慢界の思想素材

それでは次に、『處胎經』に説かれる懈慢界の思想素材について検討したい。『處胎經』の制作者が、いずれの經典の説をもとにこの懈慢界の説を創出したかという問題であるが、後世にその異同が問題とされるように、〈無量壽經〉諸本に見られる邊地[14]がすぐに想起される。むろん參考にした經典が一つのみとは限らないが、内容の共通性からして少なくともその中心となったものが邊地の説であろうことはおそらく疑いようがないものと思われる。

ただし〈無量壽經〉には、二十四願系の『大阿彌陀經』『平等覺經』＝「初期〈無量壽經〉」と四十八願系の『無量壽經』『無量壽如來會』、サンスクリット本、チベット本＝「後期〈無量壽經〉」に大別され[15]、兩者間には思想内容に相當の變遷が認められる。いまの邊地に關する所説についても、「初期〈無量壽經〉」では三輩段の中輩段・下輩段に付説されるのに對し、「後期〈無量壽經〉」では三輩段とは別に胎化段として獨立しており、内容についてもかなりの相違が見られる[16]。

そこでいずれが『處胎經』の懈慢界の素材となったものかを検討してみると、明らかに後期よりも初期の〈無量壽經〉との間に、より強い關連性が指摘できることが分かってきた。

これについてまず、邊地に生ずる原因から見れば、「初期〈無量壽經〉」に屬する『大阿彌陀經』三輩段のなか中輩には次のように説かれている。

若其人然後復中悔。心中狐疑。不信分檀布施作諸善後世得其福。不信有彌陀佛國。不信有往生其國。雖爾者。其人續念不絶。暫信暫不信。意志猶豫無所專。據續其善願爲本故得往生。　（大正一二、三一〇頁上、傍線筆者）

若し其の人然る後に復た中悔して、心中に狐疑して、分檀布施し諸の善を作さば後世に其の福を得ることを信ぜず、彌陀佛國有ることを信ぜず、其の國に往生すること有ることを信ぜず。爾りと雖も、其の人念を續けて絶えず、暫くは信じ暫くは信ぜず、意志猶豫として專らなる所無し。其の善願を續くるを本と爲すに據るが故に往生を得。

傍線部「暫くは信じ暫くは信ぜず。意志猶豫として專らなる所無し」とあるのが、『處胎經』の懈慢界に生ずる原因の「皆な懈慢に由りて執心牢固ならず」と、内容的に共通するもの

があると考えられる。[17] いずれも心の状態がふらふらと定まらない状態である。

これに對して「後期〈無量壽經〉」に屬するいわゆる魏譯『無量壽經』では、邊地に生ずる原因は次のように說かれている。

若有衆生。以疑惑心修諸功德。願生彼國。不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智疑惑不信。然猶信罪福修習善本。願生其國。

（大正一二、二七八頁上）

若し衆生有りて、疑惑心を以て諸の功德を修し、彼國に生ぜんと願はん。佛智・不思議智・不可稱智・大乘廣智・無等無倫最上勝智を了らずして、此の諸智に於て疑惑して信ぜず。然るに猶お罪福を信じ善本を修習して、其の國に生ぜんと願はん。

ここでは、佛智等の佛の五智は疑う、しかし罪福については信ずるということであるから、心の狀態が定まらないということではない。「執心牢固」との關連性を見出すことは難しいであろう。

また、邊地の位置に關する表現にも注目したい。「初期〈無量壽經〉」の『大阿彌陀經』では以下のようにある。

其人壽命終盡。卽往生阿彌陀佛國。不能得前至阿彌陀佛所。便道見阿彌陀佛國界邊自然七寶城中。心便大歡喜。便止其城中。

（大正一二、三一〇頁中、傍線筆者）

其の人壽命終り盡くるに、卽ち阿彌陀佛國に往生すれども、前みて阿彌陀佛の所に至ることを得ること能わず。便ち道に阿彌陀佛の國界の邊の自然七寶の城中を見て、心便ち大いに歡喜し、便ち其の城中に止まる。

復去阿彌陀佛甚大遠。不能得近附阿彌陀佛。

（同右）

復た阿彌陀佛を去ること甚だ大遠にして、阿彌陀佛に近附すること得ること能わず。

また、「後期〈無量壽經〉」の魏譯『無量壽經』では以下のようにある。

汝等宜各精進求心所願。無得疑惑中悔自爲過咎。生彼邊地七寶宮殿。五百歲中受諸厄也。

（大正一二、三六〇頁下、傍線筆者）

汝等宜しく各の精進して心の所願を求むべし。疑惑し中悔して、自ら過咎を爲して、彼の邊地の七寶の宮殿に生れて、五百歲の中に諸の厄を受くることを得ることなかれ。

邊地が極樂の內部的世界とされていることは、初期・後期の〈無量壽經〉に共通するが、魏譯『無量壽經』では位置に關連する記述は傍線部「彼邊地」くらいで、中心から外れた邊境の地であると說かれるのみである。

これに對し『大阿彌陀經』では傍線部「不能得前至阿彌陀佛所」「去阿彌陀佛甚大遠」と、邊地と阿彌陀佛との位置關係に關する記述が見え、とくに最初の「不能得前至阿彌陀佛所」は、『處胎經』の「不能前進生阿彌陀佛國」と表現もかなり近似している。もちろん『處胎經』の懈慢界は、少なくとも經文からは極樂の外部にあると讀めるものであり、この點は『大阿彌陀經』の邊地說とも相違するのであるが、後述するようにそれは『處胎經』制作者の意圖的改變によるものと考えたい。

なお、「初期〈無量壽經〉」の邊地の上に、懈慢界との對應が見いだせない部分もある。それは先の『處胎經』引文②の懈慢界の世界描寫である。もう一度引用しよう。

西方去此閻浮提十二億那由他。有懈慢界。國土快樂作倡伎樂。衣被服飾香花莊嚴七寶轉關床。擧目東視寶床隨轉。北視西視南視亦如是轉。（大正一二、一〇二八頁上）

西方此の閻浮提を去ること十二億那由他に懈慢界有り。國土快樂にして倡伎樂を作す。衣被・服飾・香花もて莊嚴し、七寶轉關の床あり。目を擧げて東を視れば寶床隨ひて轉ず。北を視、西を視、南を視るも亦た是の如く轉ず。

まず、「西方去此閻浮提十二億那由他」という懈慢界と閻浮提との距離であるが、『大阿彌陀經』では極樂と閻浮提の距離は「千億萬の須彌山佛國」（大正一二、三〇三中）、魏譯『無量壽經』では「此を去ること十萬億刹」（大正一二、二七〇頁上）とある。これに比して『處胎經』の「十二億那由他」は、「佛國」「刹」等の數字の單位が示されず、また數字自體にも獨自のものがある。

また、懈慢界の有り樣についても、『大阿彌陀經』の邊地の描寫に「七寶城中」（大正一二、三一〇頁中）「自然華香」（同）と

あるごとく、懈慢界と共通する表現も見られるが、懈慢界の描寫に特徴的と思われる、七寶の床が見ようとするとそれにつれて回轉する（七寶轉關床。擧目東視寶床隨轉。北視西視南視亦如是轉。）との表現は、〈無量壽經〉の邊地には對應するものがない。

こうした相違については、何によるものか課題として殘さざるを得ないが、ともかくここでは、上述してきたごとく『處胎經』の制作者が、懈慢界の基本的な素材を「初期〈無量壽經〉」に得ていると考えられることを確認しておきたい。

六、經典制作者の意圖の反映

以上のように、八種身品には阿彌陀佛の國土のことが說かれるが、それは決して極樂への往生を勸める意圖をもつものではないこと、そして懈慢界の主な素材となったものは『大阿彌陀經』『平等覺經』という「初期〈無量壽經〉」に說かれる邊地の說であると考えられることを見てきた。これらを踏まえた上で、再び八種身品の懈慢界について、その文言の上に、どのように經典制作者の意圖の反映を看取することができるか、次の三つの點を指摘したい。

まず一點目は、前揭③の文にあるように、懈慢界から極樂世界へと往生できる者は、億千萬に時に一人しかいないと說かれる點である。これに對應する記述は、素材となったであろう〈無量壽經〉の邊地の說には見出せず、『處胎經』獨自の說と思われる。そして『處胎經』に極樂往生を勸める意圖がないことを考慮すれば、極樂往生の困難性を强調するために付加されたものではないだろうか。極樂往生の道は、釋尊のなしたこの娑婆世界での菩薩行に比べれば劣るものであると一方では位置づけ、しかも他方では往生自體の困難性、非現實性を强調するという二段構えで、阿彌陀信仰から釋迦信仰へと誘引しようというのが、そこにある意圖と見たい。

二點目は、〈無量壽經〉の邊地が、極樂の內部的世界と位置づけられ、內部ではあるが中心の阿彌陀佛からは遠い邊地であり、それゆえ阿彌陀佛を見ることができない等と說かれるのに對し、『處胎經』の懈慢界は前揭③の文にあるように、極樂の外部にあり、極樂そのものから遠く隔たった世界であるように說かれている點である。これは億千萬に時に一人のみという一點目の付加と一連のもので、懈慢界を極樂の外部とすることで、往生の困難であることを示そうとするものであろう。また〈無量壽經〉では初期・後期を通じて邊地の宮殿に處する期間を五百歲と明記しており、時間の經過に隨った

脱出の可能性を含ませているが、『處胎經』の懈慢界の説がこうした具體的な時間を明記しないことも、同様の意圖によるものと考えられる。

三點目は、極樂への往因を説くなかに見られる「執心」という語句である。「執心一向」「執心牢固」なる者は極樂へと生じ、「執心不牢固」なる故に懈慢界に墮すと、「執心」は懈慢界と極樂を分けるキーワードとして用いられているわけであるが、すでに見たように、同じく『處胎經』八種身品には、末尾の偈頌のなかで、獨覺（覺佛）について説く文に「執心」の語が使われている。

執心入定意　衆相各不異

（大正一二、一〇三〇頁上、傍線筆者）

執心にして定意に入らば　衆相各の異ならず

一方、釋尊については、「眞念」の語が使われている。

如來至眞念　除想不入定
還入衆生中　因造更造緣

（大正一二、一〇三〇頁上、傍線筆者）

如來眞念に至りて　想を除くるも定に入らず
還りて衆生の中に入りて　因を造り更に緣を造る

この「執心」と「眞念」の語は、文脈からして次のように對義的關係にあると言える。

獨覺　―　執心　／入定する　／差別の相を見ない
釋尊　―　眞念に至る／入定しない／衆生と因緣を造り　濟度する

明らかにここでの「執心」には、利他を欠いているという否定的意味合いが與えられていることが分かる。そして同一章（八種身品）のなかで、極樂への往生者と獨覺を説く上にいずれも重要語として「執心」の語が用いられていることは、おそらくは經典制作者の意圖的なものではないだろうか。すなわち、極樂の往因に「執心」の語を用いて「執心一向」「執心牢固」と説きながら、執心が牢固であり一向であることは、他面においては他者の救いを顧みない佛道のあり方でしかないと、極樂への往生者が菩薩道として利他を欠いていることを、往因の上に暗に含めているものと推察されるのである。

七、小結

本稿では、『處胎經』において懈慢界がいかなる意圖のものに説かれたものかを検討してきたが、阿彌陀佛の極樂國土そして懈慢界を説きながら、極樂への往生を勸めるのではなく、釋尊のなした菩薩行を讃えることにその意圖があったことが明らかとなった。そしてこの結果は、すでにレジッティモ氏により指摘されている釋迦信仰の鼓舞という『處胎經』全體の性格と一致するものであった。

續いて、『處胎經』の懈慢界の思想素材を検討し、『處胎經』の制作者は『大阿彌陀經』『平等覺經』という「初期〈無量壽經〉」の邊地の説をもとに懈慢界の説を創作したものと推定した。またそこから再び『處胎經』の懈慢界にもどって、經典制作者の意圖がどのように經典の文言の上に反映されているかについて私見を述べた。

『處胎經』の懈慢界の説は、後世の淨土教の解釋とは大きく異なる意圖をもって説かれていたのであり、本來この懈慢界の説が、淨土教といかなる關係・距離感にあるものか、その大局が知られたように思う。それだけに興味深く思われるのは、淨土教の立場からすればある種の異物的な内容を含むこの懈慢界の説が、歴史的に見れば、はからずも淨土教の思想深化を資助する役割を果たしていくことになる點であろう。こうした後の展開については、改めて論ずることにしたい。

注

(1) 〈無量壽經〉の表記は、漢譯諸本ならびにサンスクリット本・チベット本の總稱として用いている。

(2) 鎌田茂雄他編『大藏經全解説大辭典』(雄山閣出版、一九九八年)一〇九頁、加治洋一氏執筆箇所。

(3) 丘山新「竺佛念」(『佛教文化』一七號、東京大學佛教青年會、一九八四年)。

(4) 『出三藏記集』の該當箇所は以下の通り。

至姚興弘始之初。經學甚盛。念續出菩薩瓔珞十住斷結及出曜胎經中陰經。於符姚二代爲譯人之宗。

(大正五五、一一一頁中)

姚興の弘始の初に至り、經學甚だ盛んとなり、念、續けて菩薩瓔珞・十住斷結及び出曜・胎經・中陰經を出せば、符・姚二代に於て譯人の宗爲り。

(5) 『佛書解説大辭典』第九卷(大東出版社、一九六五年)四〇二頁、美濃晃順氏執筆箇所。

(6) Elsa I. Legittimo, "Synoptic Presentation of the Pusa chu tai jing (PCJ) 菩薩處胎經 the Bodhisattva Womb Sutra PART

I (chapters 1–14)", Sengokuyama Journal of Buddhist Studies, vol. II, 2005, pp. 1–111. "Synoptic Presentation of the Pusa chu tai jing (PCJ) 菩薩處胎經 the Bodhisattva Womb Sutra PART II (chapters 15–38)", Sengokuyama Journal of Buddhist Studies, vol. III, 2006, pp. 1–175. "The Vimalakirtinirdesa's Narration on the Amrta Distribution and its Exploitation by the Pusa chutai jing's Authors", Journal of Indian and Buddhist studies 55 (3), 2007, pp. 1079–1084. "A comparative study between the Womb and the Lotus sutra : Miraculous stupa apparitions, two simultaneous Buddhas and related extraordinary narrations", *Journal of Indian and Buddhist studies* 56 (3), 2008, pp. 1114–1120.

(7) 前註 Elsa I. Legittimo[2008]論文要旨。

(8) 多屋頼俊他編『佛教學辭典』(法藏館、一九五五年)「懈慢」の項目では「懈怠慢惰の意で、ものごとに熱中しないこと。また懈怠僑慢の義」とある。また『淨土眞宗聖典七祖篇(註釋版)』(本願寺出版社、一九九六年)には源信『往生要集』所引の『處胎經』當該箇所の「懈慢」について「懈怠心(なまけ心)や驕慢心(あなどり)」(一一二七頁脚注)とある。

(9) 雲英晃耀『愚禿鈔講錄』(眞宗大學寮、一八九四年)に「懈慢界」の語義に關して「樹心模象ハ懈怠驕慢ノ義ニ解スレトモ據ノ處胎經ニハ執心不牢固ヲ毀責シテ名ツケシ名ナレハ懈怠慢墮ノ義ヲ可トス」(卷上、七七頁、傍點筆者)とある。

(10) 『漢語大詞典』(上海辭書出版社、一九八六年)「懈慢」の項目に「懈怠輕慢」「懶惰散漫」とある。

(11) 「執心」の語について『漢語大詞典』(上海辭書出版社、一九八六年)には「猶秉性」「謂心志專一堅定」とある。この「專一」の意味が『處胎經』には「執心一向」と表現されていると言えよう。

(12) 大正一二、一〇二八頁上。

(13) 「覺佛」とは『菩薩處胎經』卷六、四道和合品第二十二に「無師無智不因彼此。故名覺佛」(大正一二、一〇四五頁上)とあるように獨覺(辟支佛)のことであろう。

(14) 本論では名稱として「邊地」の語を採ったが、生まれ方を表す「胎生」の語をもって言う場合もあり、また「疑城胎宮」とも言い慣わされる。なお、「邊地」の語が直接見えるのは〈無量壽經〉漢譯異本のうち『無量壽經』のみであるが、『大阿彌陀經』に「阿彌陀佛國界邊」(大正一二、三一〇頁中)とあるように、思想的には「初期〈無量壽經〉」以來のものと言える。「胎生」の語は「後期〈無量壽經〉」のみに見える(「初期〈無量壽經〉」は「化生」)。藤田宏達氏はこの「胎生」の譯語の問題點を指摘され、化生の他に胎生という生まれ方があることを意味するものではないことを論じられている(藤田宏達『原始淨土思想の研究』岩波書店、一九七〇年、五二三～五二五頁)。

〈キーワード〉『菩薩處胎經』、懈慢界、極樂、邊地

(15) 三十六願系の『大乘無量壽莊嚴經』については、邊地に關する所說は四十八願系に近いと言えるが、有相にとらわれ分別するゆえに胎生に處すると說かれるなど、特徵的な思想が見られる。いずれにしても、二十四願系に比して『處胎經』の懈慢界との關連性は薄いものと見られる。

(16) 薗田香勳『無量壽經諸異本の研究』(永田文昌堂、一九六〇年)二〇九～二二六頁、二三九～二四〇頁參照。なお、本論では「初期〈無量壽經〉」のうち『大阿彌陀經』を取り上げたが、邊地に關する所說は『平等覺經』もほとんど相違がない。「後期〈無量壽經〉」については、諸本間で若干の相違が見られるが、本論では煩瑣になるため略した。

(17) 『處胎經』の懈慢界と「初期〈無量壽經〉」の邊地に關する往因の共通性については、日本の三論宗の淨土敎者である珍海の『決定往生集』においても、次のような言及が見られる(ここで珍海が引いているのは『大阿彌陀經』ではなく『平等覺經』)。

所言懈慢國者、卽是極樂之邊地也。所言執心不牢固者、卽是暫信暫不信義胎生之人。疑惑中悔卽懈怠過。
(大正八四、一〇五頁中)

言う所の懈慢國とは、卽ち是れ極樂の邊地也。言う所の執心不牢固とは、卽ち是れ暫信暫不信の義、胎生の人なり。疑惑中悔とは卽ち懈怠の過なり。